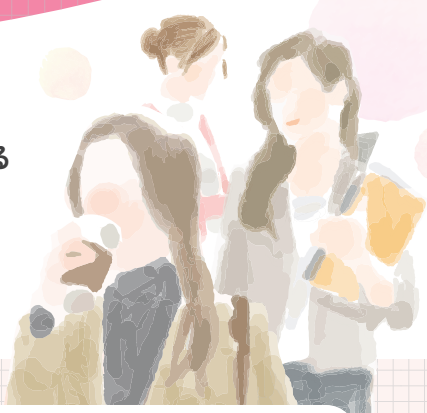
新潟県

“HPVワクチン”キャッチアップ接種等のお知らせ

1年間の経過措置が設けられます

2024年夏以降の大幅な接種需要の増加により、
HPVワクチンの接種を希望しても受けられなかった方がいる
状況等を踏まえ、2025年3月末までに接種を開始した方が、
全3回の接種を公費で完了できるように
1年間の経過措置が設けられます。



対象者 次の2つの条件を満たす方

1. **1997年4月2日から2009年4月1日生まれの女性**
   ※キャッチアップ接種対象者と2024年度が定期接種最終年度の方
2. 2022年4月から2025年3月末までにHPVワクチンを
   1回以上接種し、接種が完了していない方

2025年度も2、3回目の接種を 無料(公費) で受けられます

2022.4月	2025.3月末	2025.4月	2026.3月末
接種を開始 →		無料(公費)で接種できます →	

2025年3月までに1回目の接種をしていれば
無料(公費)で全3回の接種を完了することが可能です

1回も接種されていない方は、3月末までに、接種を開始することをご検討ください。

HPVワクチンの効果と副反応

HPVワクチンの効果

HPVワクチンには、3種類のワクチンがありますが、
9価ワクチン(シルガード®9)では、
子宮頸がんの原因の80〜90%を防ぎます。

HPVワクチンの接種により、感染予防効果を示す
抗体は少なくとも12年維持される可能性が
あることが、わかっています。

HPVワクチンの副反応

HPVワクチン接種後には、接種部位の痛みや
腫れ、赤みなどが起こることがあります。

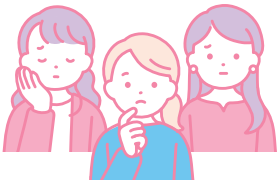
まれですが、重い症状(重いアレルギー症状、
神経系の症状)※が起こることがあります。

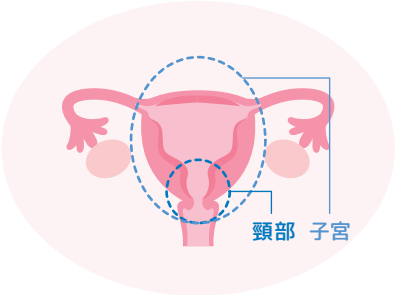
※重いアレルギー症状:呼吸困難やじんましん等(アナフィラキシー)
※神経系の症状:手足の力が入りにくい(ギラン・バレー症候群)、
頭痛・嘔吐・意識低下(急性散在性脳脊髄炎(ADEM))等

接種後に健康不安があるときは、まずは接種した医療機関やかかりつけ医にご相談ください。

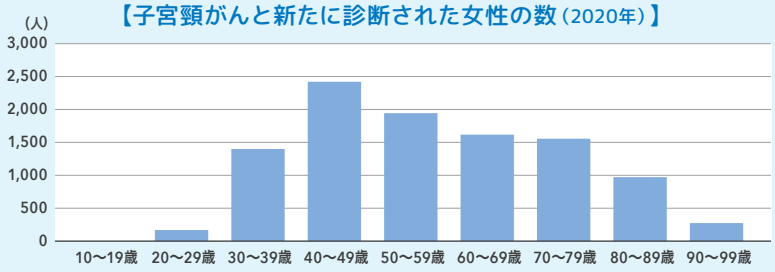
子宮頸がんについて

子宮頸がんは、子宮の頸部という子宮の出口に近い部分にできるがんです。
子宮頸がんは、若い世代の女性のがんの中で多くを占めるがんです。
日本では毎年、約1万人の女性がかかり、毎年、約3,000人の女性が亡くなっています。
患者さんは20歳代から増え始めて、30歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう（妊娠できなくなってしまう）人も、1年間に約1,000人います。





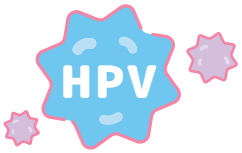
【子宮頸がんと新たに診断された女性の数（2020年）】



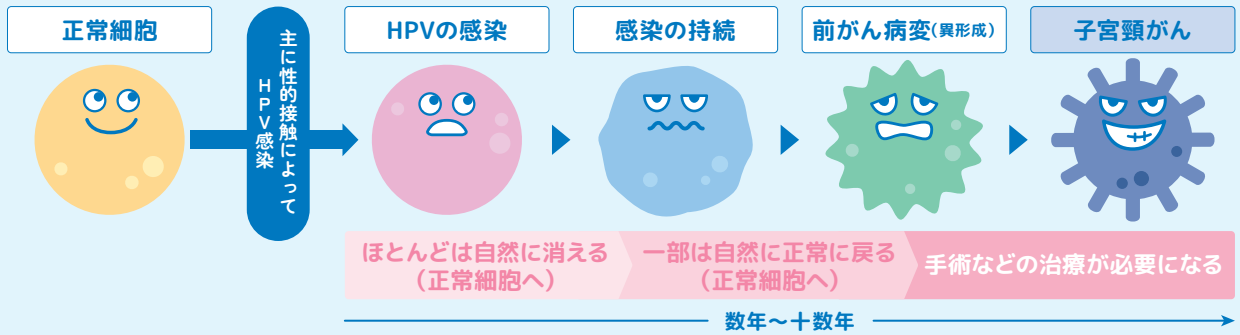
出典：国立研究開発法人国立がん研究センター（がん種別統計情報）より作成

子宮頸がんにかかる仕組み

子宮頸がんのほとんどがヒトパピローマウイルス（HPV）というウイルスの感染で生じます。
HPVには200種類以上のタイプ（遺伝子型）があり、
子宮頸がんの原因となるタイプが少なくとも15種類あることがわかっています。
HPVに感染しても、すぐにがんになるわけではなく、いくつかの段階があります。



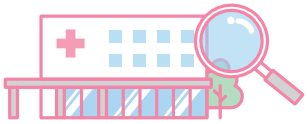
【HPV感染からの子宮頸がんの進行】



HPVは、女性の多くが“一生に一度は感染する”といわれるウイルスで、感染しても、
ほとんどの人ではウイルスが自然に消えますが、一部の人でがんになってしまうことがあります。
現在、感染した後にどのような人ががんになるのかわかっていないため、
感染を防ぐことががんにならないために重要です。

HPVワクチンと子宮頸がん検診

子宮頸がんで苦しまないために、私たちができることは、
HPVワクチンの接種と子宮頸がん検診の受診の2つです。



point 1 HPVワクチンで HPVの感染を予防

＋

point 2 子宮頸がん検診で がんを早く見つけて治療

ワクチンを接種をしていても、していなくても、20歳になったら、定期的に子宮頸がん検診を受けましょう。

詳しくは
コチラから

新潟県福祉保健部感染症対策・薬務課　TEL.025-280-5200